「全鍍連」 ２０２４年 ９月号 巻頭言

全鍍連 監事 中村 淑子 (㈱渡辺鍍金工場 代表取締役)

「ともに未来へ」

新紙幣発行、パリ オリンピック・パラリンピック、大きなイベントに彩られて過ぎてきた 2024 年も後半となりました。皆さまの地ではどのような秋をお迎えでしょうか。全鍍連 監事を仰せつかっております㈱渡辺鍍金工場 中村（渡辺）淑子です。先輩方が築いてこられたこの業界を健全に次代に繋いでいくために、精一杯努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

今年のＮＨＫ大河ドラマ「光る君へ」は平安時代を舞台にしたせつない恋の物語です。主人公は「源氏物語」の作者紫式部。その時代の貴族社会では、一般には勉学は男子のみに授けられるものであったようです。そんな背景から、ドラマの中では、幼少期より娘に文学の才を見出していた紫式部の父が「おまえが男であったらのう」としばしば嘆いています。さて現代はどうでしょう。

私は幼いころから「理工学部に行くように」と父に言われて育ちました。学部の何たるかもわからない年齢でしたが「オリコウのガクブならいいか」と自分の進路を定めたことを覚えています。私たち製造業にとって「技術力」は大きな柱。創業者である父は私に技術者として会社を率いてもらいたいと考えたのでしょう。無事に父の思いを果たした私は、大学で機械工学を専攻、卒業後は総合メーカーで空力設計のエンジニアとして 10 数年勤めました。その間に社内結婚、2 人の娘の育休、「リケジョ」という言葉がまだなかった 20 世紀のことです。

その後、今の立場になった私は昨年、東京組合の理事会に初めて出席しました。会議室にずらりと並んだ男性方を見て、その威厳に圧倒されつつも、私と同じように「めっき屋の子ども」として育った人がこんなにたくさんいるんだと大いに驚き、そして嬉しくなりました。休日の人のいない工場に、ゴム長靴、ビニール前掛け、天井から吊り下げられた治具、そしてたくさんの網カゴが整然と並ぶさま、今では日々当たり前に見る光景ですが、遥か昔の記憶の中で私の原風景でもあります。そんな景色を共有している仲間が東京のみならず日本全国にいるのかと思うと、何とも愉快であり、また心強さを感じます。

全鍍連創立 75 年（2023 年）、現在の加入事業所数 1155 社。最近のめっき業実態基礎調査（全鍍連誌 6 月号）によると、現社長の 98%以上が 2 代目、3 代目、それ以上の経営者です。今年の全鍍連総会では、神谷会長が全国組織の青年部の立ち上げについて話されました。昔を知る方は事業所数の減少に驚かれるかもしれませんが、まさに「少数精鋭」の時代となりました。企業規模の大小によらず、あるいはそれに応じた特長を持って、それぞれが自社の強みを認識して共存していく、それがこれからの私たち業界の在り方ではないでしょうか。青年部はもちろん、全鍍連や各地の組合という組織はそういう役割を担っていると思うのです。

奈良の大仏様の滅金から始まって、江戸時代に島津斉彬公が取り入れたとされる近代めっき。源氏物語が 1000 年の時を経て今も読み継がれているように、私たちのめっき業はものづくりに不可欠な産業として、進化し発展していくことでしょう。「未来は訪れるものではなく創るものという言葉を信じて前進」、神谷会長のこの年頭所感をあらためて心に刻み、100 年後、1000 年後の未来のエンジニアたちが、「令和」の私たちの技術に感嘆している姿を想像しつつ、業界の一員としてより一層精進してまいります。ともに進みましょう。末永いお付き合いをよろしくお願いいたします。